

## 「入出二門偈頌」における 不思議と不可思議の研究

菊村紀彦

親鸞の「入出二門偈頌」は、「往還偈」と呼ばれるように、「謹按浄土真宗、有二種廻向。一者往相、二者還相。就往相廻向、有真実教・行・信・証」(教行信証 教巻)の領解を更に演繹し、かつその源泉となつた世親の「無量寿経優婆提舍願生偈」への讃歎をこめて記述したものである。が、ここで往還二廻向を論ずるのではなく、このなかに記述されている不思議と不可思議の意味を思量したい。しかし、そのことは、親鸞がこの「二門偈頌」だけにこの両語を使用したというわけではなく、ひとつのサンプルとして取りあげたに過ぎないことはいうまでもなからう。親鸞は、「教行信証」の中に不思議を十二箇所、不可思議を二十五箇所、またその他の著述には、不思議を七十五箇所、不可思議を三十七箇所ほど使用している。就中、「二門偈頌」には、双方とも三箇所記述され、バランスがとれている。そこで当該偈を選択して考察したい。

不思議は、「五者弘法不思議・此中仏土不思議・有二種不思議力」とあり、不可思議は「世親菩薩依大乘、修多羅真実功德、一心帰命尽十方、不可思議光如来」と「不可思議兆載劫、漸次成就五種門」及び「卑濕淤泥生蓮華、此喻凡夫在煩惱、泥中生仏正覺華、斯示如来本弘誓、不可思議力即是、入出二門名他力」である。さて、両語を

梵語に原点を探れば、*acintya*(非思量)のほかはない。不可思議の漢訳にやや近似しているが、この梵語は、不思議と弁別出来ない。浄土教での、この語は *guhya*(秘密)ではなく、神秘ではない。仏智不思議といえは、非思量ながら仏恩感謝の意がこめられているように思われる。不可思議の場合は、阿弥陀仏の異名たる「難思光仏(*caintya-puraha*)」(無量寿経)や「不可思議尊」(浄土和讃)やまた、前掲の「不可思議光」は、すべて阿弥陀仏を意味する。不思議は、「の」または「な」などという助詞を必要とする、不可思議の体を形容するものである。無論、親鸞はそれらの用法を意識していたであろうと思われるが、他の著についての例外は、ここでは触れない。

不思議の例は、「浄土和讃」に、「神力自在なることは 測量すべきことぞなき 不思議の徳をあつめたり 無上尊(阿弥陀仏)を帰命せよ」とあり、また「尊号真像銘文(広本)」に、「大願業力の不思議をうたがうころもて」とあり、「末燈鈔」に、「ただ不思議と信ぜさせたまひ候ぬるうえは……」とある。これらの不思議は、いわば修辭的用法であり、阿弥陀仏そのものを表現するものではない。一方、不可思議の例は、「教行信証行巻」の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」とあり、また「愚禿鈔」に、「我」の言は、尽十方無礙光如来なり。不可思議光仏なり」とあり、「浄土文類聚鈔」に「西方不可思議尊」や「不可思議の願を演暢す」とある。ここでの不可思議は、明かに阿弥陀仏であることは明白だが、最終例の「不可思議の願」は、修辭にもとれるが、仏の本願であるから、単なる不思議よりは強意といえるだろう。阿弥陀仏という意味のほうが理解しやすいのである。

さて、「二門偈頌」を觀よう。「仏法不思議」と「仏土不思議」と「二種の不思議力」だが、何れも阿弥陀仏を表現してはいない。「な」や「の」を入れるべき性格であろう。それに対して、「一心に尽十方不可思議光如来」と「不可思議兆載劫」と「不可思議力」であるが、第二の「不可思議兆載劫」だけは、阿弥陀仏そのものではないが、しかし、五劫思惟の願を意味するに違いないから、単なる不思議という修辭に終止せず、阿弥陀仏的表現が感得されてならない。第三の「不可思議力」は、前の「不思議力」と異なり、「これは如来の本弘誓の不可思議力であり、ここでも阿弥陀仏自体の力ということになる。「五者仏法不思議」の「二門偈頌」と関連ある「高僧和讃(曇鸞)」に「いつつの不思議をとくなかに 仏法不思議にしくぞなき 仏法不思議といふことは 弥陀の弘誓になつたり」とある。ここには、三箇所ほど不思議が使われているが、何れも仏をあらわすものではなく、形容詞的表現である。「弥陀の弘誓」を、「不可思議と思考したい。五つの不思議とは、曇鸞の記述によれば「五種不可思議」になつている。「衆生多少・業力・竜力・禪定力・仏法力」であるが、曇鸞は、親鸞の用法とは異なり、あたかも、親鸞記述の不思議を意味する。

親鸞は、不可思議を仏……真如法性なるものに觀でいたようだが、試みに日蓮と比較するならば、かの妙法(Saddharma)であろうかこの語が「法華經」を意味するように、浄土教においては「阿弥陀仏」を意味するものと考えられる。しかし、「無量寿經」では、不可思議が不思議の用法に記されている。例とせば、四十八願の中、三十一・三十三・三十四・三十五・三十六・三十七・四十二・四十五願には、「無量不可思議」と表現(翻訳)されているが、梵語原典で

「入出二門偈頌」における不思議と不可思議の研究(菊村)

は、アチンティヤートウルヤ(Acintyātūrya)である。このように見てくると、梵語原典では、かならずしも、一定せず、不可思議でも、前掲の難思(光仏)でも一様にアチンティヤである。してみれば、漢訳も多様であり、厳密な区別はないものと思われる。ちなみに、「無量寿經下巻」の「皆共讚歎無量寿仏威神功德不可思議一は、不思議であり、同じく下巻の「十方世界 無量無辺不可思議諸仏如来」は、仏を表現するものと見てよからうと思うが、確証はない。日本仏教のパトスとして思考するならば、不思議には、微妙ながら思弁的要素が含まれ、不可思議には、思弁が皆無なものであろう。不思議には、思量する人間の分別が全くないとはいえず、不可思議は、完全な非思量であり、知恵といえよう。だから、浄土教とは、不思議な仏法である。不可思議の仏を信じ、不思議な国土に往生せんとするものである。

親鸞の「二門偈頌」を觀て、その感が弥増す。不思議な法と呼ぶ時には、不可思議の仏に対する感謝の感情があり、不可思議の仏と呼ぶ時には、不思議な法に摂取されているのである。不思議とは往相の機であり、不可思議とは還相の仏ではあるまいか。

1 荻原改訂本では、不思議光と訳され、梵文では *Ahiviryapra-ha* になつている。

2 曇鸞の「浄土論註」下巻。

3 智度論三十に五事不可思議の記述がある。